

## 無意識の思い込みと心の壁

### 横山 由紀子先生（兵庫県立大学経営学部教授）

京都大学大学院経済学研究科博士後期過程単位取得退学。博士（経済学）京都大学。神戸商科大学経済研究所助手、兵庫県立大学経営学部講師、准教授を経て、2016年より現職。専門は労働経済学および社会保障論。女性の経済的自立を主な研究テーマとし、女性の就業意識や就業行動について調査・分析している。兵庫県職業能力開発審議会委員等。



米谷 淳（以下、米谷）：先生は経営学のご出身ですか。

横山由紀子（以下、横山）：いいえ、経済学です。でも、もともと大学に入ったときは文学部でした。3年次に経済学部に転部し、経済学のおもしろさを初めて知りました。

米谷：最初はどんな文学に興味があったのですか。

横山：具体的な興味はなかったのです。ただ、高2の時に、大学の文学部の先生の講義の中で、「法学とか経済学は勉強で、文学こそ学問だ」という言葉にすごく心動かされました。ただ、それはあくまで高校生だったからで、今では法学も経済学も学問だと認識しています。

米谷：その後、大学で経済学に目覚めたのですか。

横山：勉強し始めてからですね。大学3年生のときに、社会保障の先生のところで勉強をしました。その先生は、考える力、本質を見抜く力を持った方で、とても感銘を受けました。

米谷：社会保障の中でも先生の御関心はどういうところにあったのですか。

横山：修士のときは保育でした。そのときは、保育のことがまだ問題になってない時期で、社会保障と女性就業と子どもをテーマにしました。その後、労働経済学を研究するにしたがって、もともと興味を持っていた女性の経済的自立に研究が進んでいきました。

米谷：大学院時代に先生がおやりになっていた手法が、今、先生がゼミ生に教えてらっしゃるアプローチにつながるわけでしょうか。

横山：あまり私の研究と授業が直接関係するということはありません。私の授業は労働経済学関係ですが、結局のところ学生が勉強として覚えた知識はいつか忘れるので、それよりは考え方を身につけてほしいと思っています。研究の中で常に意識しているのは、統計資料でも、新聞でも、読者は鵜呑みにしてはいけないということ。学生には、まずは客観的に資料を見て、自分で考える力をつけて欲しいと思います。そして、そこには必ず思い込みがある。無意識の思い込みがあると物事がうまくいかないし、数字だけが読めても解決できないことがあります。普段の授業では、その2点を意識するように指導しています。

米谷：先生のホームページを見させていただくと、そのような記述がたくさんありますね。ゼミ中心、少人数教育でおやりになっていらっしゃる。例えば課題探求。自分で考える力をつけるために、先生はどのような介入やフォローをしていますか。



横山：私のゼミでは、ゴールが見えてしまわないように、私の意見はなるべく言わないようにしています。学生は自由なテーマで、まず自分で考え、発表し、その場にいた学生がディスカッションをします。こうして普段から考える癖やコメントする力を身につけてほしいと思っています。

米谷：データワークが中心の経済学的なアプローチですね。

横山：はい。あとは書籍の先行研究をやります。

米谷：そして、批判的思考を鍛えられておられるのですね。

横山：ここ二、三年で講義でもスタイルを変え、ゼミ的な方法を用いた時間をとっています。また、高校生向けの出張授業のときも、考える力を身につけてもらうという意味で、統計を用いて反論するという練習をしてもらいます。

米谷：統計などの数字にだまされない思考については、谷岡一郎先生の『「社会調査」のウソ・リサーチ・リテラシーのすすめ』という本は、面白いですね。

横山：はい。最初はまさにその本をベースとして、その後いろいろと身近な例を集めて、そして、最近は学生に合わせてアレンジした内容を作るという形でやってきました。

米谷：サンプリングの手続き一つで、結果がどうでも変わるという話も谷岡先生の本に書かれていますが、先生もやられますか。

横山：はい。よくやります。学生の反応もよく、「目からうろこ」みたいな感じです。学生の「へえ」という言葉が出る瞬間がいいですね。

米谷：あの瞬間は、「待ってました」と思いますね。先生がおっしゃるように、答えを教えないで、自分たちで考えさせてというのは、重要ですね。あとはうまくいったらほめますか。

横山：はい。ほめると自信につながるのがよくわかります。一つのことをほめると、それが自信となって他のことも向上させようとチャレンジする姿をよく目にします。

米谷：県立大学に来られて、もう15年ぐらいになりますが、県立大学の学生のイメージはどのようなですか。

横山：すごく素直な子が多いですし、大変優秀な学生もいます。公立大学ですので、様々な事情で遠くの大学に行けなかったとか、浪人ができないから確実に受かる県大に

来たというような学生もいて、こうした学生は大変優秀です。一方で、経済的に自活している学生もいて、中にはアルバイトをしすぎて単位が取れていなかったり、いつも眠そうだったりする学生もいます。でも、そういった学生がいることで、全体的に何か強さがあるように感じます。

**米谷：**研究というよりも、実学が中心ですか。

**横山：**そうですね。素朴に真面目にやっている感じですが。でも、教員として彼らと接するのはすごく楽しいです。ポテンシャルがそれなりにあるけれど、まだ磨き切られていない子が結構いるので、ちょっとした刺激ですごく伸びることがあります。以前は、教室全体の平均的なレベルを少しでもアップできれば、と考えていましたので、アドバイスも全体的な一般論が多かったのですが、最近は方針を変えました。応用科目ということもあり、受講生の人数もそれほど多くないことを活用し、できるだけ個々のケースに対してアドバイスするようになりました。すると、中には見違えるように急激に伸びる学生がいて、それが他の学生への刺激にもなり、その波及効果がとても大きい。教育が楽しいと思える瞬間ですね。

**米谷：**先生のゼミは何人ぐらいいらっしゃいますか。

**横山：**2年生、3年生、4年生でゼミはそれぞれ10人ぐらいです。

**米谷：**2年生の場合は、必ずしも先生のゼミに上る学生ばかりではない。

**横山：**そうですね。半分ぐらいです。今の4年生ゼミは男の子ばかりです。結構はっきり指導しますので、きついことを言っているつもりはないのですが、女の子からは怖いイメージがあるのかもしれない。ただ、最初に来ていないところを指摘したうえで、プレゼンの改善策や、文章の書き方など、細かなところを具体的にアドバイスすると、学生自身も成長を実感しやすいので自信につながるのかな、という印象です。

**米谷：**それはゼミの中で先生が声かけされますか。それとも、個別に呼んで話をしますか。

**横山：**両方やります。ただ、大抵のアドバイスは他の学生の参考にもなりますので、なるべく全体で行います。また、最近、授業のスタイルを講義形式からディスカッション形式に変えました。おとなしく、発言しなかった女子学生に発言の機会を持たせると、急激に成長したこともありました。中学・高校の体験から目立つことを避けている学生が、心の鎧を外し、自分の意見を言ったとき、ぐっと伸びるようです。また、向上心を素直に表に出せる学生がいて、その学生が急激に伸びていく過程を目の当たりにすることで、他の受講生や全体の雰囲気も変化していきます。そういう意味では学生同士の刺激が一番効果的で、私自身の役割は、成長したいという気持ちを持たせる場の雰囲気作りをサポートすることだと思っています。

**米谷：**おもしろいですね。

**横山：**待つのが大事な部分もありますが、タイミングよく刺激を与えることも重要で、そこがとても難しい。でも、最近はそのような教育がすごくおもしろくなってきました。

米谷：学生は研究指向ですか。それとも、実行（実学）指向ですか。

横山：県大の経営学部では大学院に進学する学生はそれほど多くありませんので、メインは社会で活躍できる人材の育成となります。

米谷：人材育成ですよ、どっちかという。社会で活躍する経済人。そうすると授業は、学生がまず問題を発見するところからスタートするのですね。

横山：そうですね。私が講義するのではなくて、記事を読ませて、頭だけではなく、心が感じる違和感によって本質を見抜く力を養いたいと思っています。違和感に気づくことができれば、本質的な議論になります。学生の議論では、頭だけで考え、正論だけで戦う場合が数多く見られます。それだと社会を動かすことはできないので、自分の心が感じる違和感とか、自分の思い込みを認識しながらディスカッションすることを促しています。

米谷：そういう違和感を上手に育てて、研究とか、あるいは社会に何か貢献できるような切り口を見つけて、自分で何か成果を出していこうという指導は、3年になってからですか。

横山：それは、学年に関らず、授業でもゼミでも常に意識しています。

米谷：例えば、男性が自分の男性社会の問題点みたいなものを改めて考え直すようなこともやったりしますか。

横山：はい。いわゆる男性学というのを、授業でも扱います。女性労働とか、男女共同参画については、男子学生は他人事だと思っているようです。そこで、男子学生に自分達の問題として直接アプローチする方法として男性学を取り入れています。そのせいか、男子学生の今年の卒論テーマに、男性の育休とか、ワーク・ライフ・バランスなどもありました。

米谷：男女共同参画の問題は、そういう指導なら、男子学生にも様々なテーマを考えさせることができると思いますね。

横山：そう感じています。また、話し合いをさせた後に放置せずにまとめることも必要だと思えます。労働問題について、2年生、3年生、4年生と一緒にディスカッションさせると、当然4年生のほうが意識もしっかりしていて議論をリードします。ただ、逆に社会を知ってしまったことで凝り固まった意見になり、正社員だから遅くまでばりばり働くのは当たり前だといったような、昔戻りの現実的な思考になることがあります。

米谷：ステレオタイプ化するということですね。

横山：はい。社会を知り始めた4年生ほど、「それは理想ではあるけれど、現状では難しい」と下級生を牽制することがあります。そこで私がいつも言うのは、「現状では難しいから無理だ」というのではなく、まずはゴールを決めて、どうやって、理想の状況に近づいていくべきなのかを考えることこそが大学生の議論だということです。また、大学に来られるような学生は社会に対する認識、格差とか貧困に対する危機感が足りない傾向があるので、そうした問題への危機感をあおるように意識しています。

**米谷：**先生が若手のこれからの大学教員、あるいは、もっとキャリアを積んでいく若手女性教員の人たちにメッセージを与えたとしたらどんなことがありますか。

**横山：**私は、30歳と40歳で10年間をあけて二人の子供を出産しました。身近な周囲の先生方には今も以前も常にサポートし



ていただいています。比べてみると、今の大学の環境はすごく両立しやすくなったという実感があります。それに加えて、自分自身にも変化がありました。1人目の子育てのときは、子供がいることをあまりアピールしないよう行動することを心掛けていました。でも、それではだめだと気づきました。自分が我慢すればそれでいいわけではなく、次の世代につながる行動をとるべきだと最近では思っています。男性社会のなかで男性として働くのではなく、ものごとへの費用対効果を意識することが大事だと思います。容易にできること、大変な思いをすればできるけれどもあまり効果がないこと、頑張ってもできないこと、といったことを自分で判断し、それを周囲に伝える。自分の心の持ち方を変えたことで、今では周囲の先生にサポートをお願いをする心のハードルが下がり、とても働きやすくなって、10年前よりもずっと生産的になったと思います。そして、実はこうした自分の心の変化も、理解ある男性の先輩教員の存在やサポートによるところが非常に大きいです。

**米谷：**最初は、ガードがちがちで頑張っていたのですね。

**横山：**はい。もっと女性の割合が増えたら、もっと無理しなくてもよくなると思います。女性比率が1割と3割では全く違うので、女性が多ければもっと自然体で働くことができると思います。

**米谷：**二、三年前に授業のスタイルを変えられたそうですが、その理由をお聞かせください。

**横山：**それまでは講義中心のスタイルで、私がスライドを準備して話をしていました。そうすると、ぼんやりしている学生も必ずいて手応えが少なかったのですが、双方のやり取りを入れると手応えを感じ、アドバイスすることの重要性にも気づきました。ただ、大人数のなかでアドバイスや注意をすると反感を持つ学生もいて、アンケートに「ああいうのは聞いていて嫌だ」とか、「先生の指摘の仕方、口調が嫌いです」と書かれることもあって、私もアドバイスすることをちょっと自制してしまいました。そこで、毎年第1回目の授業の最初に「この授業はディスカッション中心で居眠りも私語もなし、更に見前でアドバイスを受けることを嫌がらないこと」を受講条件として提示しました。受講生はその条件を受け入れた学生だけとなったことが功を奏しました。受講する学生は、「この授業では自分が活躍してもいいん

だ」という気持ちになったようです。そして、私自身も、心の壁が取り払われ、自然体でいられるようになりました。

米谷：それって必修科目ではなかったということですね。

横山：そこは大きいです。やっぱり必修科目ではないからできた授業スタイルです。

米谷：講義方法に関して、先生自身が女性であるということと何か関連はありますか。

横山：女性のほうがきつく見られるとか、もしくは、楽勝科目だと思われやすいということで以前は変な気負いがあった気がします。講義スタイルを変え、私らしく指導するようになると、特に女子学生が積極的に意見を言うようになりました。

米谷：最初のころは僕もびくびくしていて、授業ノートに全部記録していましたし、授業がつまらないといわれたら、次の機会はおもしろく思わしてやると思った熱血時代もありましたが、少しずつ変化していきました。

横山：私もまだまだ成長できるよう頑張ります。

米谷：これからも頑張ってください。ありがとうございました。

(インタビュー日：平成28年12月20日)